

## つひのすみか

君津佳孝

プロローグ

「お父さん、おばあちゃんが顔から血を流して倒れている」

日曜日、夕方から焼酎のお湯割りを飲み始め九時過ぎに寝てしまった僕の体を揺り動かしながら、そう呼びかける息子の声で目を覚ました。

普段はおやし呼ばわりする息子がお父さんと呼んだその言い回しに、いつもとはちがう事の重大さを感じる。

跳び起きると、二階で母屋と繋がっている渡り廊下を通って中に入り、階段を駆け下りた。トイレのドアは開けっ放しになっており、入口のところに母が倒れている。顔の周りは血だらけで、ボリウムが少なくなつて地肌の見えている銀髪にも所々血がこびりついている。左半身を下にして横たわっている床にも血が飛び散っていた。

息子にティッシュペーパーの箱を持ってこさせると、僕は丁寧に血を拭き取った。鼻の頭あたりが傷もとらしく、血は止まっていたがパツクリと割れて肉が少し見えている。パジャマにも血が飛び散っており、ズボンもビチャビチャだった。どうやら倒れた時に失禁してしまつたらしい。頭も打っている可能性があり、動かさない方が良いと思ひ、とりあえず母に問いかけた。

「大丈夫？　話は出来る？　どこか痛いところはあある？　頭は痛くない？」

「大丈夫」

気丈な大正生まれを思わせるしつかりした声が返ってきた。

「横になりたいから、ベッドまで連れて行って」

母が命令するような口調でそう言った。

「頭を打っている可能性もあるから、そのままじっとして。今救急車を呼ぶから」  
息子に一一九番させると濡れたタオルを持ってくるように言い、再び辺りに飛び散っている血を拭いていった。

「ベッドで横になりたい」

再び母が訴えかけたが、

「寒くない？　大丈夫？」

僕はトンチンカンな受け答えをした。

様子を聞きつけて風呂に入っていたという妻も、渡り廊下を伝って下りてきた。取り急ぎパジャマと替えの紙パンツを用意してもらおう。妻に頼み、替えさせようとしていたところに救急車が到着した。

玄関からヘルメットをかぶった大柄な救急隊員が二人入ってくる。二人は

「すみません。先に手を洗わせてください」

と言うと、トイレの洗面所で手を洗った。そして母に向かい

「おばあちゃんしゃべれる？ お名前は？ お歳はいくつ？ 今日は何日かわかる？」  
型通りの質問を投げかけて行く。母は日にち以外、少し間を置きながら答えた。

「日にちと曜日はわかりません。いつも質問すると、母は手元の新聞を見て答えます」  
僕が母の代わりに答えた。隊員は続けて質問する。

「どこか痛いところある？ 何かして欲しいことは？」

母から間髪入れず答えが返ってきた。

「ベッドに戻って横になりたい」

隊員はうん、と言って軽く頷くと母の体をチェックし始めた。

「おばあちゃん、パジャマが濡れているね。ズボンを先に履き替えようか」

母が首を縦に振ると、二人がかりでパジャマを脱がし、紙パンツを替えてくれた。着替えのズボンをはかせる時、隊員の一人が

「左足がむくんでいますね、ほら。普段からこうなのですか」僕に問いかける。

初めてみる、抜けるように白い母の脚に一瞬ドキッとしたが

「普段もふくらはぎから足首にかけてはむくみがちなのですが、こんなにひどくはありません。一週間ぐらい前にも台所のあたりで倒れたので、その影響があるかもしれません」

妻の美代子が代わりに答えてくれた。

心拍数や体温、血圧などを一通り測定すると隊員は母をストレッチャーにのせた。救急車には僕が先に乗り、すぐに母が乗せられてきた。運転席に控えていたもう一人の隊員が、救急対応をしてくれる病院を探すため電話をかけまくっている。コロナ禍の中、しかも日曜日とあって対応してくれる病院はなかなか見つからない。

ようやく五件目でOKが出た病院は、僕が腰痛の治療で通っている「T医療センター」で、家から車で三十分ぐらいの所だ。

しかしさすがに救急車。サイレンを鳴らしながら二十分弱で病院に到着した。



寝る前に飲んだ睡眠剤のせい少し頭がくらくらする。お手洗いにきたくなり、ベッド柵を伝って上半身を起こした。横に置いてもらった鉄製の手すりにつかまり、シルバーカーを押しながらお手洗いに向かう。お手洗いに着いて手すりを掴もうとした時、一瞬立ち眩みのように意識が飛んだ。気がついた時は目の前に床が迫り、顔から床に落ちた。

「ドスン」という自分自身の倒れる音が聞こえる。

手を突くことも足を踏ん張ることもできなかった。はずみで左半身を下にして横向きになった。鼻の横をツーと暖かいものが伝わる。どうやら出血したらしい。僅かな痺れが起き、口の中が痛くなってきた。私の倒れた音を聞きつけたのか、洋室で暮らしている孫が二階から降りてくる音がした。

「おばあちゃん大丈夫?」

声が聞こえたが横向きになっているので孫の姿はわからない。軽く頷くと、またトンと階段を上って行く音。体全体が石になってしまったようで重く動かない。身動きが取れないまま目をつぶっていると、やがて息子の勝巳の声が聞こえた。

「大丈夫? 話し……」

そこからあとは何と言っているのかわからなかったが、とりあえず頷いた。お小水でパジャマを少し濡らしてしまったようで、グシヨグシヨして気持ち悪い。とにかく早くベッドに戻りたい。

「お母さん、大丈夫ですか?」

美代子さんの声が聞こえてきた。私の耳元でゆっくり問いかけてくれるので聞き取りやすい。すぐに私の手と肩のあたりを触ると、

「こんなに冷たいじゃないですか」

そう言っただけでシヨールを持ってきて私の体にかけてくれた。やはり勝巳と違って気が回る。美代子さんに

「横になりたいのでベッドまで連れて行って下さい」

と、頼むと

「お母さん、頭を打っているかもしれないので動かさないのです。じきに救急車が来ますから、それまで我慢して頂けませんか。暖かい麦茶がありますけど召し上がりますか?」  
なるほど理にかなっている。

「お茶はいりません」そう言っただけで私はまた目を閉じた。



「おばあさん、大丈夫ですか？」

息子とは違う男の人の声がした。救急車が来たらしい。名前と生年月日を聞かれる。

「滝吉ツル。95歳」

今日は何日で何曜日か聞かれたがわからない。もう私にとって日には関係なく、毎日が日曜日なのだ。それより一刻も早く濡れたパンツとパジャマを着替えたかった。

「おばあちゃん、パジャマが濡れているね。着替えてから病院に行こうか」

ついに見つかってしまった。救急車の人が息子に何か質問しているような声が聞こえる。

「おばあちゃん、下を脱がすよ」

どうやら二人掛かりで履き替えらせてくれているようだ。下半身が一瞬ひんやりしたあと暖かくなった。キヤスター付きの担架で運ばれ、救急車に乗せられるとからだ全体がホカホカしてきた。眠くなってきたが鼻と口の内側が痛く、目をつぶって救急車が病院に到着するのをじっと待った。

## 1 初日（月曜日）

病院ではレントゲン・CTスキャン等の検査を行ったが骨折はしていなかった。しかし鼻の頭を三針縫ってタクシーで家に帰ってきた。口の裏を自分の歯で傷つけたらしく、口まわりは内出血で赤く膨れ上がりオレンジウータンのようになっていた。

日曜日の午後十時半過ぎに救急車で病院に向かい、月曜朝の四時過ぎに家に帰ってきた。約五時間病院に居たことになる。タクシーが家に着くと、妻の美代子が車椅子を用意して玄関の前で待っていた。二人掛かりでタクシーから降ろすと、車椅子に乗せ家に入った。リビングはストーブで暖まっており、ポットにはお湯が沸かしてあった。

「お母さん、熱いお茶召し上がりますか」

美代子が問いかけたが、母は

「いりません。それより眠りたい」

そう答えたためベッドに向かった。上に着ていたダウンベストを脱がせ、二人がかりで寝かせると、母は

「電気も暗くしていいよ」

と言い頭から布団をかぶってしまった。

寝室の電気は消したがリビングの方を点け、母が覗けるように引き戸を半分ほど開け



て、病院での経緯を妻に話した。そして

「今日は母屋に泊まる。とりあえず今週は仕事を休むよ。会社には明日の朝、ラインで連絡するから。朝食は母が起きてから家で食べる」

そういうと僕は、和室から布団を持ってきて母が寝ているベッドのもう一方の端に敷いた。母は既に寝息を立てている。妻が家に戻った後、僕も床に就いた。布団はヒンヤリ冷たかったが、すぐに体が吸い込まれるように意識が薄れて行った。

◇  
起きると月曜日だが祭日だったため、終日母に付き添っていた。怪我を聞きつけて繭子（上の妹）と幹雄（弟）が駆けつけてきた。那須に住んでいる鮎子（下の妹）からはラインで連絡があった。

家族会議を開き、

——身内だけでの二十四時間介護は難しい。施設に入ってもらう事を検討しよう——  
という結論になった。

一週間前にリビングで倒れたほか、一か月ほど前にも家の斜め前にあるコンビニに行こうとし、店の入り口の所で転倒している。一人では起き上がれないので、倒れると近くにいる人の世話にならざるを得ない。

ここ半年の間に、歩行の補助が「杖」から「シルバーカー」に変わってきた。外に出るのを怖がり庭周りの散歩も行なわなくなった。一人で準備していた食事の支度も、今は美代子に任せっぱなしになっている。耳も聞こえづらくなり（その割には幾つかある補聴器は使用しないが）認知も進んできた。新聞を見ないと今日が何日の何曜日かわからない。

検討した際の入居の条件は、

①家から近い事 ②介護付きで、予算は母の遺族年金の範囲（月額約二十万円以内）である事だ。

ネットで調べると、三件ほど条件に当てはまる物件が出てきた。そのうち「サンフラワーK」という老人ホームは現在、見学会をやっているという。早速電話をかけて明日の午後一時でアポイントを取った。

施設への入居が決まるまで、食事は妻と繭子が支度を行ない、就寝から朝までは僕と繭子が交代の泊りがけで見守りをするというルールを作った。

◇  
夜の八時半、母の就寝時間に再び母屋に行く。睡眠剤を飲ませ母が寝た後、しばらくテレビを見ながら缶ビールを一本飲み、僕も床に就いた。

「お手洗いにいきたい」

母の声で目が覚めた。時計を見ると夜中の一時。母はベッドの柵越しに呼びかけている。僕は寝ている母の上半身を抱き起こそうと試みたが、体が重く起き上げる事ができない。何度か試みたが結局馬乗りになって僕の首に腕を巻きつけてもらい、上半身を抱き起こした。次に、車椅子に乗ってもらうため一旦立ち上がってもらわなければならない。僕はベッドを降り、再び首につかまらせると中腰になって母を立ち上げらせる。抱き上げたとき甘酸っぱい匂いが母の体から漂ってきた。どこか遠い記憶を呼び覚ますような懐かしい匂いだった。車椅子に乗せてトイレまで連れて行く。トイレの手すりにつかまらせながらパジャマのズボンを脱がす。トイレの電球に照らされた母の足は、昨日見たなまめかしい白い脚だった。

「用は自分で足せるね。ドアは開けておくよ」

そう言うとは僕はトイレから出て後ろ向きになり用が済むのを待った。本当は紙パンツを脱がせて便器に座らせるまでやってあげたいのだが、やはりためらわれた。

十分ぐらい経っただろうか。カラカラとペーパーを手練ったあと水を流す音がした。さらに五分ぐらいして、

「終わりました」という声が聞こえる。

再び車椅子に乗せてベッドに寝かせるまで、結局四十分かかった。僕は一日目にして介護の大変さの一端を知った。

## 2 初日〔Ⅱ〕

ボタンボタンという音がして雨戸が開き

「起こしちゃったかな。七時半だけど起きる？」

という勝巳の声で目が覚めた。私は首を横に振ると寝返りを打って頭から布団をかぶった。

「ストーブは今点けたから。朝刊は机の上に置いておくよ」

と言って勝巳は自分の家へ戻って行った。

体がだるく重い。動くに動けないでウトウトする。

「お母さん大丈夫？」

今度は繭子の声が出た。何か食べられるか聞かれたが食欲がない。時間を尋ねると八時半だという。食事の支度を断って再びまどろんだ。

一回、お手洗いに連れて行ってもらった記憶はあるのだがまたすぐに寝てしまった。



◇  
やがて話し声で目が覚めた。リビングには三人の子供たちと美代子さん・雪子さん(幹雄の嫁)が集まって話し合いをしている。

「お母さんも聞いてくれない?」

勝巳にそう話しかけられ、繭子がベッドのリモコンを操作して上半身を起こすと腕を交叉して手すりにつかまらされた。そして腕が平行になるよう体を反転して立つと、繭子は私が腰を下ろすところに車椅子を移動させた。

「へえ。そうやってベッドから車椅子に移すの。意外と簡単だね。リモコンがあるのも知らなかったよ。早く教えてくれればいいのに」

勝巳が繭子に憎まれ口をきいている。

「お母さんこれを付けて」

美代子さんに言われ集音機のイヤホンを耳に付けると、皆の声がよく聞こえてきた。

「体がなんともなくてよかったですね、お母さん。でも口がはれ上がって痛そう」

雪子さんの声が聞こえてきたが、すぐに勝巳が話を切り出してくる。

「皆で話したのだけれど、僕らだけで二十四時間お母さんの面倒を見るのは難しそうだよ。そこで相談だけれど、施設に入る事を考えてみたらどうだろうか」

私は言葉を選びながら、少し間を置いて答えた。

「私もこのまま一人で暮らすのは大変だし、皆に迷惑をかけるのも申し訳ないと思う。ただ、施設に入るにしてもお父さんの恩給で賄える範囲で、近くないといやだよ」

「わかった。検討してみる」

勝巳はそういうと、またあれこれ話し合いながら、以前取り寄せたことのある老人ホームのパンフレットを引っぱり出して来たり、スマホで調べたりしている。私は少し眠る、と言うとベッドまで連れて行ってもらい横になった。

◇

夕方、少し胸焼けがして目が覚めた。喉から酸っぱいものが上がって来る。既にみんな帰っており、勝巳しか残っていないなかった。

「今日は僕が泊まるよ」

「ありがとう。まずお手洗いに連れてって」

そう言ってお手洗いへ連れて行ってもらった。トイレから出ても胸焼けはまだ続いていたため胃薬をもらって飲んだ。少し熱っぽく体がだるかったが、何か口にしておきたかった。勝巳が冷蔵庫から「ウイダーインゼリー」を出してきてくれた。それを一気に飲むとまた横になった。睡眠剤は飲んだかどうか覚えていないがそのまま眠ってしまった

た。

夜中にお手洗いに連れて行ってもらったようにも思うのだが、あまり覚えていない。

### 3 二日目（火曜日）

ローテーションで今日は妹の繭子が泊まりの番だ。その日、夜中にトイレで三回ほど起きたが、母がポータブルトイレで用を足してもよいと言ったそうで、ベッドのすぐ横で用を足してもらい、かなり楽だったという事を繭子から聞いた。

早めの昼食を摂ったあと、僕は美代子と昨日アポイントを取った「サンフラワー」の現地見学会に行った。

施設の出入口は二重になっており、内側のドアは中からしか開かないようになっている。一つ目のドアを入った横の洗面所でうがいと手洗いをし、体温を測るとインターフオンで来意を告げた。職員が中からドアを開け、僕たちは全身に消毒液を噴霧されヘッドカバーと使い捨てのビニール製上衣を身につけた。かけていた自分のマスクは捨てるように言われ、新品のマスクを渡される。履いたスリッパにもビニール製の使い捨てカバーを付けられた。

支配人が出てきて入居説明をする。さすがに責任者だけあって物言いに如才がない。型通りの説明を終えたあと、二階の居室に案内してくれた。

最初に見せてもらった二階の22号室は南側の角部屋だった。目の前の道を隔ててT上水の遊歩道が見渡せる。道沿いにアジサイや山吹・熊笹などが生えており、春になるとスギナなどの野草も出てくるという。何よりも圧巻なのがT上水沿いの桜並木だ。今はまだ葉のない枝のままだが、春になると華やかな満開の桜が遊歩道沿いに咲き誇る姿が、容易に想像できる。もう一部屋、西側の中住戸も見せてもらったが、その部屋と先ほど見た南側の部屋の家賃が同じというのが信じられない。

「南側の22号室なら即決で契約します」

僕は支配人にそう言うのと応接室に戻って契約までの段取りを聞き、必要な書類を一式貰って家に帰った。

帰るとすぐ入居申込書に記入捺印してファックスで施設に送った。スマホで内容を見たときは月額十五万円からとなっていたが、諸経費を含めると二十万円近くはかかりそうだ。それでも父の遺してくれた年金でギリギリ賄える。捺印の必要な書類が三十数種類、ご丁寧に書類チェック用の一覧表も付いている。全部読みながら記名捺印して行く。と丸一日はかかりそうである。夕食を終えたあと書類に一気に目を通したが、終わった



時には午前0時をまわっていた。

4 二日目〔Ⅱ〕

朝、お手洗いにいきたくて目が覚める。勝巳かと思ったら繭子だった。体を起こして車椅子に乗せてくれようとしたが、私はそれを制して

「ポータブルトイレで用を足すから持つてきて」と頼んだ。

車椅子に乗せてもらってトイレまで行くもどかしさもあるが、私を車椅子に乗せたり降りしたりする手間も一苦労だと思う。

ベッドわきの手摺に横向きで立つと、繭子がひざ下にポータブルトイレを持ってきてくれた。紙パンツを脱がしてもらいドスンと腰を落とすと、そこで用を足す。トイレの底には紙おむつが前もって敷いてあり、用を足したあと繭子は手際よく水分を吸った紙おむつをポリ袋に入れて口を結び、ゴミ箱に捨てた。その紙おむつは三年前亡くなった父が、尿漏れが始まった時、頑として履くことを拒みそのまま大量に残っている「忘れ物」だ。捨てたあと次回の用足しに備え、新しい紙おむつを敷いてくれている。

難儀なことだ。

5 三日目（水曜日）

朝七時半に繭子とボタンタッチで昼の見守りをしに行く。母は眠っておりまだ朝食を摂っていないそうだ。美代子におかゆを作ってもらおうよう頼むと、おかゆは出来るまで小一時間かかるという。

朝食を済ませて九時過ぎに母屋に行くと母は眠っていた。僕は昨日貰って来た入居のための書類三十数種類に記名捺印してゆく。書類は今日中に仕上げて提出するつもりだ。兄弟たちに「介護付き老人ホーム」の申し込みをしたことをラインで告げ、市役所へ向かった。必要書類の中に母の「住民票」があり、それを入手するためだ。その帰りにコンビニで母の「保険証」のコピーをとった。保険証自体もホームへ預けることになる。あと必要なのは「健康診断書」だけだ。七か月前に市で受信した診断書はあるのだが、半年以内に実施したものでなければだめだという。とりあえず並行して健康診断は受けるという事でホームの了承をもらった。

昼間に三回トイレに行った。繭子がポータブルトイレにするようになったと言っていたが、僕はやはり車椅子に乗せてトイレで用を足してもらった。紙パンツを脱がせるの

はこちらが恥ずかしい。二日前に泊まった時はトイレに行かせるのに中腰状態の動作が多く、僕の方に持病の腰痛が出てきてしまった。そのため今日は医療用コルセットを着して 介護に臨む。自分のリハビリをしているようでどちらが介護されているのかわからないが、腰への負担は軽くなった。夕食を食べ終わり睡眠薬を飲ませて母を寝かせた後、僕も十一時頃床に就いた。

しかし、夜中の一時ごろ目が覚めるとベッド脇の畳の上で、パジャマ姿で横になったまま恨めしそうにこちらを見つめている母と視線が合ってしまった。

「一体どうしたの？」

「お手洗いに一人で行こうとしたけれど、ベッドから落ちてしまったの」

「パジャマのままじゃないか。いつからそうやっているの？」

「もう三十分ぐらいになるかしら」

最初は頷いて聞いていたが、だんだん腹が立ってきた。

「なぜ僕を呼ばない。しゃべれないわけじゃないだろ」

「寝ているところ悪いと思って……」

いったい誰のために、何のために泊まっているか。最初には気づかずに寝ていた自分に腹を立てたが、それは母への八つ当たりとなって飛び火した。

「今度ちゃんと呼ばないようだったら、泊まるのをやめるぞ」

畳に寝そべっている重い母の上半身をまず抱き起す。次に僕の首に掴まらせて一旦ベッドに座らせる。再び首を持たせて立ち上がり、その間に車椅子をスライドして座らせた。車椅子でトイレまで行きズボンを脱がせると僕はトイレの外に出た。十分ぐらいして水を流す音がし、それから五分ぐらいすると

「済んだ」

という声が出た。

僕はトイレの中に入り再び首に抱きつかせて立ち上がらせるが、その時まだちゃんと履けていない母のズボンを腰までしつかりズリ上げる。車椅子でベッドまで連れて行って寝かせるとトイレの儀式が終了するのだが、一回トイレに行って再び戻るまで三十分弱かかる。寝かせる前に僕は母に命じた。

「今度から名前を呼べるように、いま練習してみな。『勝巳、お手洗いにいきたい』さあ声を出して」

「……」

「勝巳お手洗い、きちんとと言えるまで寝かせないよ。さあ、勝巳お手洗い」

「勝巳お手洗い」



「声が小さくて聞こえない。もう一度。勝巳お手洗い！ さあ」  
「勝巳お手洗い」

「そう。出そうと思えば出せるじゃないか。今度からちゃんと呼ばなきゃだめだよ」  
あとで考えるとずいぶん酷なことをしてしまったと思う。でもそういう時に呼んでくれなきゃ僕の泊まっている意味がないのだ。

6 三日目〔Ⅱ〕

「お母さんおかゆ召し上がりますか」

美代子さんの声で目が覚めた。お腹が空いているかどうかはわからなかったが、出された物を食べた。まだ唇の裏側が少し痛くて、熱いものを食べると沁みる。食後ウトウトしていたがお手洗いにいきたくて昼頃また目が覚めた。

日中、勝巳が家にいてくれて車椅子でお手洗いに連れて行ってくれる。勝巳に連れて行ってもらうとお手洗いが二十分以上かかる。お小水も満足に出ず、結果として行く回数が多くなる。夕食を食べたあと夜八時過ぎに睡眠剤を飲んで床に就いた。

こんなに子供たちに手間をかけるなら、施設に入ってしまった方が楽だ。早くどこかに決めてくれないだろうか。本当は65年以上住み暮らしたこの家を『終の棲家』にしたかったのだが……

夜中、お手洗いにいきたくなりベッド柵を伝って起き上がり両足をベッドから下ろした。手すりを掴もうとしたがバランスを崩してそのまま滑り落ち、畳に突っ伏してしまった。勝巳はいびきをかいて寝ている。何とかして起きようと思うのだが、重石を上から乗せられたようで体が動かない。

しばらく手足を動かそうとしてみたが、重石を乗せられた亀のようで身動きが取れない。やがて寒さで体が冷えブルブル震えてきた。せめてシヨールだけでも羽織りたいのだが、一メートル先のスツールの上にあるそれが目に見えていても手が届かない。体が移動すらできないのもどかしい。

震えながら暫くじっとしていると勝巳が目を覚ました。何か言っているが、よく聞き取れない。私は早くお手洗いにいきたいだけなのだ。ようやく起こしてもらいお手洗いにいき、用を済ませベッドに戻って寝ようとする。勝巳が何か言っている。そして

「勝巳お手洗い」という言葉を繰り返す。多分そう言えとっているのだと思い

「勝巳お手洗い」と言うをやっと寝かせてくれた。繭子ならポータブルトイレで用を足させてくれるのに……

手間ばかりかけて、本当に申し訳ないと思う。

## 7 四日目（木曜日）

朝八時にいったん家に帰る。入れ替わりで妻の美代子が母屋に行つて朝食の支度をす  
る。おかゆを持って行つたが食べなかった。三日ほど便秘気味という事で、母もそれが  
気持ち悪いらしい。母屋に戻り午前中いっぱいかけて契約書類の最終チェックを行った。

昼食を食べたあと、出来上がった書類一式を「サンフラワーK」へ届けた。その間に  
訪問リハビリの看護師が来て、母の検診とりハビリを行つてくれた。家に戻つてきて様  
子を聞く。その女性は母が便秘気味と知るとお腹をしばらくマッサージしてくれたが、  
そのあと手袋を付けて便を肛門から掻き出してくれたという。ウサギの糞のようなコロ  
コロしたものが何個か出てきたらしい。有難く申し訳ないことだ。

母の上唇の周りもまだ内出血で赤茶色になつてはいるが、腫れはだいぶ引いてきた。  
午後は食事の時以外、一日中眠つていた。兄弟にはラインで「サンフラワーK」に書類  
を出してきたことを報告したが、母にはどのタイミングで告げようか。

夕食を摂ったあと、今日も僕が泊まるというと、母はお手洗いの時はポータブルトイ  
レで用を足してもかまわないと答えた。これで夜中のトイレもだいぶ楽になる。



午後八時半。睡眠剤を服用させて母を寝かせたあと、缶酎ハイを一本飲んだ。そして  
眠りについた十一時半ごろ

「お手洗いにいきたい」という声で、ハッと我に返った。

僕はポータブルトイレをベッドのすぐ横に置き、上半身を起こして立ち上がらせよう  
とすると、母は僕の首に両腕を巻き付けてきた。抱き上げる時、母の左胸が僕の体と密  
着した。柔らかい母の左胸はゴム鞠のように弾力がある。右胸は二十年前乳がんで全摘  
していた。立ち上がった時、首に抱き付かれたままズボンと紙パンツを脱がせる。体を  
九十度回転して便器に腰掛けさせた。僕が後ろを向くと、すぐにチヨロチヨロという音  
が聞こえてくる。音は三十秒ぐらい続きそのあとティッシュを取り出す音がした。少し  
経って

「済んだ？」

と聞くと

「済んだ」

という答えが返ってきた。



立ち上がらせ紙パンツをはかせる時、寝室の豆電球の灯りで母の臀部が視界に入ってきた。それは横にゆったり大きく青白さが妙になまめかしい。ちよつとドギマギしたが、すぐにパジャマのズボン履かせベッドに寝かせた。

用を足し終えたあとは、ポータブルトイレの下に敷いた紙おむつが、水分を含んで重くなっている。次の用足しに備えて使い捨ての手袋をはめ、重くなった紙おむつを取り出すとポリ袋に入れる。ポータブルトイレの横や底にまだたまっているお小水をティッシュペーパーで拭き取って、使った手袋と一緒にこれもポリ袋に入れしっかりと口を結ぶ。

紙おむつを便器の底に敷くのは、用足しを簡便にするにはどうすればよいか、あれやこれや考えたうえでアイデアである。便器を防菌消臭剤でスプレーし、新しい紙おむつを敷いてセットが完了する。一般ごみと別にしてある大きなゴミ袋に入れ、戻って寝ようとする母はまだ起きていて一言呟いた。

「ありがとうございます」

その後、朝まで二回ほどトイレで起こされたが車椅子に乗せて用を足していた時よりはるかに楽である。用を足したあと、敷物交換のわずらわしさはあったが、僕はそのたびに言われる「ありがとうございます」の一言しか覚えていない。

## 8 四日目 〔Ⅱ〕

あまり食べないせいなのだろうか、三日ほど便が出ない。要心して朝はみかんだけ食べた。口の裏側の痛みは無くなったが、倒れて下になった方の脇腹がまだ痛い。午前中鎮痛剤を飲んで寝ていた。

お昼は美代子さんが出してくれた柔らかめのおかゆを全部食べた。昼過ぎに訪問リハビリの人が来てくれ、検診とストレッチをしてくれた。便秘気味だと言うと手袋をはめてお尻から便を掻き出してくれた。かさぶたが取れてゆくような感じで気持ちが良い。有難いと同時に申し訳ないことだ。

横向きになり看護師の方にお尻を向けて処置をしてもらっていると、色々な思いが浮かんで来る。一人で生活できない無念さ、もどかしさは一つの結論に私を導いた。

——施設に入ろう

ようやく到達した結論は大きく膨らんで私を支配する。今住んでいる家ではない所に「終の棲家」を求めよう。介護する方も大変だろうがされる方だって大変なのだ。



心が決まったあと、夜トイレに起きて勝巳に体を起こしてもらおう時、自然に身を委ねる事が出来てこれまでのようなギクシャクした妙な緊張感がなくなった。

思えば戦後、夫とは幕屋（教会の集会）で知り合ってお見合い結婚のような形で一緒になり、着の身着のまま九州から上京した。四畳半一間の間借り生活に日々の質屋通いから始まって、65年前現在の家に引っ越して来た。その後四人の子供と八人の孫さらには五人のひ孫にも恵まれた。過去の様々な悲喜こもごも、今となっては懐かしい思い出である……

そんなことを考えながらまた眠りに就く。脇腹はまだ少し痛い。

9 五日目（金曜日）

朝八時、繭子が来てくれてバトンタッチ。自分の家へ帰ってのんびりする。夜も繭子が母屋に泊まってくれたため我が家の布団でゆっくり休んだ。

「サンフラワーK」から連絡があり、僕が提出した書類のチェックが終わり、本部に送って審査を受けるとの事。二・三日で結論が出るそう。入るまでのスケジュールも詰め、もう一週間休みを取って一気に入居までもって行くことに決めた。あとは母に話すタイミングである。さりげなく切り出し、母の未練が残らないようにしたい。不安を抱かせないように話を持って行くにはどうすればよいか。頭の中で整理しようとするがうまくまとまらない。箇条書きにして抜き出し、優先順位を付けてみたが項目はこれでいいのか、順序はあっているのか迷った。結局、筋書きを作ることはやめにした。オブラートに包まないでストレートに話そう。

五年前父が老健（介護老人保健施設）に入所した時、認知が進んでいたせいもあって父にとっては不本意ではあったが、半ば強制的に施設に入れた。

入ってから二年弱で父は亡くなったが、その途中外泊の許可が出た。自宅に二泊して帰る時、父は施設に戻る事を激しく拒んだ。結局、騙すようにして車に乗せたが、車中でそれに気づいた父は

「俺をはめたな」と僕に毒づいた。

その言葉の矢はまだ僕の心に突き刺さったままだ。同じ轍は踏みたくない。母にどこかで話を切り出すタイミングを見出せると良いのだが……



内出血で紫色に腫れた唇の痛みはまだ少しだけ残っているが、口中の痛みは治まり食欲も出てきた。生まれつき歯は良いためか食いしん坊のためか、食事時になるとお腹が空き、出された物は残さず食べる。腰の痛みも和らいできて、鼻頭に充てていたガーゼも取ってもらった。まだ抜歯をしていない鼻の頭に縫い目が見え、フランケンシュタインのおばあさん版〴〵みたいだ。一晩寝て起きて、気持ちは確固たるものになった。

——やはり施設に入ろう

趣味で描いていた日本画は三年前にやめた。やめる時子供たちが近所のギャラリーを借りて、私の個展を開いてくれた。ほとんどの絵はその時来てくれた人に差し上げた。NHKの通信講座で参加していた俳句も一年前にやめた。四季の移り変わりに感動もしなくなったし、言葉のひらめきも無くなった。

何よりも外へ出るのが怖い。家の前のコンビニに行くのさえもバランスを崩して出入口で倒れたりする。倒れると自分一人では起き上がる事が出来ず、結局誰かのお世話になってしまう。

好きな読書にも興味がわいてこない。一日経つと前の日に読んだ話の筋を忘れてしまい、ブツ切りの映画を見ているようでつまらない。目が悪くなって文字も読みづらくなっており、長時間読書をするとうれる。

仕方がないので最近はおっぱらテレビを見ている。しかし私の見ているテレビのボリュームが大きいらしく、隣の家に住んでいる勝巳が

「音が大きく我が家にもよく聞こえる。道路側の通っている人にも丸聞こえのはずだからもう少し音を下げようように」と言われた。

テレビぐらい好きに見たいものだが、仕方がないのでテレビを見るためにいちいち集音器のイヤホンを自分の耳に付ける。補聴器も持つてはいるが余計な雑音まで聞こえ、何度作り替えても耳に馴染めず好きではない。

今夜の泊り当番の繭子と勝巳が入れ替わる時、二人に切り出した。

「どこか良い所があれば施設に入りたい。家の近くにあつてお父さんの恩給で賄える範囲の所を探してくれない？」

すると間髪入れず勝巳が

「実は市内に良いところを見つけたよ。たまたま見学会をやっていたので行ってみたら南に面した角部屋が空いていて、部屋からT上水の桜並木が見わたせるポカポカ暖かい部屋だったので申し込んできた。うまくいけば今月中にも入れそうだよ」

集音器を付けていたので息子の声が良く聞こえた。

——そうなのか。手配してくれていたのだ。でもやっと心が決まったばかりなのに。まだ何かあるかもしれないのに……

「それじゃあそのまま進めて」複雑な気持ちがあが交錯する前に言葉が私の口をついて出た。床に就いてから少し考えた。手回しの良さには驚いたが、他の思いもチラつく。

——厄介者を早く追い出そうとしているのではない

しかしその思いは杞憂に過ぎない。私が難儀しないよう、皆で気を使ってくれている。今年私は年女で、十二月の誕生日で96歳になる。もう充分に生き、思い残すことは何もない。老いた母は子に従うのだ。でも少し長く生き過ぎた。

11 六日目（土曜日）

昼食が終わったあと繭子が、足浴をさせて母の体を拭いてあげると、さっぱりしたと言って喜んでいた。という。風呂に入っていないことによる自分の体臭を気にしていたらしい。

午後三時ごろ「サンフラワーK」の支配人から電話があり、審査に合格したので契約書と重要事項説明書の本人控えを取りに来てほしいとの事。行ったついでに入居までのスケジュールを確認した。先方はいつでも入居できるとの事だったが、準備を考え六日後の金曜日に決めた。施設内で着るパジャマやジャージ・下着類も一式揃えてくれる（有料）との事で、手ぶらで来て今日からでも入れるそうだ。

家に戻ってラインで兄弟に報告し入居準備を始める。準備と言っても身の回りのものと健康診断書・住民票・健康保険証だけだ。使わなくなつて押入れに眠っていたテレビを引っ張り出し、美代子と繭子には入居に必要な母の身の回りの物を用意してもらおうように頼んだ。会社にはラインで、あと一週間休ませてもらうように連絡した。時給制のアルバイトのため、休めば単に僕の手取りが減るだけである。

夕食を摂ったあと繭子と交代し母屋に泊まった。昨日からシルバーカーを使ってトイレに一人で行けるようになったと聞いている。回復も早く、手間もだいぶかからなくなつてきた。就寝前も僕は付き添っただけで、シルバーカーでトイレに行き一人で用を済ませる事ができた。

ただ用を足すときに便器に座るまでは補助をしてあげないと、一人ではうまくズボンと紙パンツを脱いだり履いたりができない。トイレが明るいので紙パンツを脱がせると、僕は外に出てドアを半開きにする。後ろを向いていると、チヨロチヨロが鳴ったあとカラカラ紙を使う音がする。



しばらくして、済んだ？ と問いかけると、済んだ、と答えが返って来る。  
立ち上がってシルバーカーに移る時、後ろから紙パンツと一緒にパジャマのズボンを吊り上げてあげる。パンツもズボンもかろうじて腰に止まっているだけで、母も吊り上げるのを待っている。懐かしい匂いと温もりがまた伝わって来た。



夜中の一時半ごろ、ガサゴソという音で目が覚めた。目に入ってきたのはシルバーカーでトイレに向かう母の後ろ姿だった。僕はびっくりして大声で叫んだ。

「ダメダメ！ 一人でいったらだめだ！」

夜中の一人歩きが心配だから寝泊まりしているのに。トイレに行く時は声をかけてと、あれほど口を酸っぱくして言っていたのに。全然言う事を聞いてくれない。

「寝ているところを起こしたら申し訳ないと思って」

冗談じゃない！

僕が眠ったままで、もし母に何かあったら一体どうすりゃいいのだ！

腹立たしいような情けないような感情が入り交ざって僕を襲う。とりあえず追いかけてトイレに付き添い、戻ってベッドに寝かせた。

——いっそのこと足に紐を付けて縛っておこうか、それともベッドの柵を高くして牢屋の様にカギをかけておこうか、はたまた睡眠剤を十錠ぐらい飲ませて朝までこん睡状態にしてしまおうか。

僕は妄想し困惑した。母は僕に怒鳴られ眠りが浅かったせいか、朝までに三回トイレに起きた。僕も見逃さないよう気を張っていたため熟睡は出来なかった。

——早く施設に入ってもらわなければこっちの身が持たない。

今まではそんな考えに陥りそうになる前に、もみ消していたのだが……

トイレに一人で行こうとしたのは精いっぱい抵抗じゃないだろうか、それともまだ大丈夫だというアピールか。

——施設に入る、という一番良い結論をお互いに見出せたはずなのに……  
天窓から差す朝の光にまどろみながら、僕は浅い眠りに落ちていった。

12 六日目 〔Ⅱ〕

昼間、繭子が蒸しタオルで体を拭いてくれ洗髪もしてくれた。久しぶりにさっぱりして気持ちが良い。身の回りの世話をしてもらう時、嫌な臭いを発しているようで気になって仕方がなかった。昼食を摂ったあとテレビを少し見ていたが、その間に繭子は私の

布団を干してくれた。休む時、フワフワでホカホカしてとても寝心地が良かった。気持ちもさっぱりしていた。ついに65年間住み暮らした家を離れるのだ。夫もいなくなったし身の回りの物も処分した。子供や孫たちも幸せに暮らしているようだ。思い残すことはない。が、体はそう言っただけではない。痛みが治まってくるとお手洗いに一人で行くようになり、車椅子に乗せてくれさえすれば食事だって一人で出来るのだ。三食の用意をしてくれればまだ一人で生活できるかもしれない。自分で出した結論に対して逡巡がよぎった。



夜中にお手洗いにいきたくなり目が覚めた。勝巳はベッドの脇でいびきをかいて寝ている。目を覚まさないように手すりを伝って上半身を起こし、シルバーカーを押してお手洗いに向かう。

——ほら、一人で出来るじゃない

リビングを過ぎてお手洗いの廊下に向かおうとした時、後ろから勝巳の声がした。

「ひとりで行けるよ」

明るく返事をしたつもりだったが、返ってきたのは怒鳴り声だった。

「何をやっているの。ダメダメ、一人で……」

どうやら一人でお手洗いにいくとうとした事に対し怒っているらしい。集音器を付けていないので勝巳が何を言っているのかはつきり分からない。とりあえず謝って、お手洗いに付き添ってもらった。用を足して戻ってきて寝る前にお礼だけは言っておいた。

「ありがとうございます」

付き添ってくれた感謝の気持ちだけは言葉にしておきたい。

13 七日目（日曜日）～十一日目（木曜日）

繭子と一日おきに母屋に泊まった。僕が泊まる日の食事は妻の美代子が母の食卓を整える。その間に家へ戻り自分の食事を摂る。だがこういう暮らしもあとわずか。

母屋に僕がいる時、母は寝ているかテレビを見ているだけだ。母と一緒に居ても特段話すことはない。それよりは滞りなく母を施設に入れてあげる段取りと、持たせるものに何か忘れ物はないかという方が気になる。準備はとっくに済んではいるのだが、何かしていないと落ち着かない。

月曜日。正式書類をすべて「サンフラワーK」へ提出。

火曜日。「サンフラワーK」で支配人と入居打合せ及び確認。



水曜日。入居前の健康診断と母の鼻頭の抜糸の付き添い。

木曜日。入居直前の準備と最終チェック、段取りの再確認。

母屋に泊まると、夜中に母はやはり三時間おきぐらいにトイレに起きる。シルバーカーでトイレまで行けるようになり歩行もしっかりしてきたのだが、そうなるとうろたえても自分一人で行こうとする。何度言っても言う事を聞かない。

食事も三食完食する。体温は平熱で、血圧は少し高いが年相応である。倒れる前の母と何ら変わりがない。夜中、泊り番でトイレへ付き添ったあと寢床で考える。

——これで良かったのだろうか？ いや、これで良いのだ。本人にとっても周りにとっても一番幸せな選択なのだ。でも本当にこれで？ まだ何か方法があるのでは？ 安易な方に逃げているのでは……

母の寝息が聞こえてきてから、僕はホッとして浅い眠りに就く。

14 七日目（日曜日）～十一日目（木曜日）〔Ⅱ〕

だいぶ体の調子が良くなってきた。口内の痛みもほとんど無くなり食事も余さず頂ける。トイレもシルバーカーを使えば自分一人で行ける。寝る前に薬を飲む時、今日が何日の何曜日かはわからないが、それだって朝刊を見れば確認できる。

睡眠剤は、縦列に曜日、横列に朝・昼・夜・就寝前と書かれてあるポケットの付いた壁掛けに入っており、寝る時、勝巳は日にちと曜日が答えられるまで薬をくれない。毎週木曜日に訪問診療の先生が来て、診察と一緒に降圧剤・睡眠剤・消炎鎮痛剤を一週間分置いて行く。それを勝巳が壁掛けのポケットの一つずつ入れて行くのだ。

一人で生活していた時、壁掛けのポケットは歯が抜けたようになっていた。飲むのを忘れてたり同じ日に重ねて違う曜日の薬を飲んでしまっただけだ。しかしそんな生活もあとわずか、住み慣れた家とお別れだ。施設に入っても外泊は出来ると言うが、今はコロナ禍で外出ができないことぐらいは私でも知っている。

とにかく未練は捨てよう。子供たちが私の『最終ステージ』を用意してくれたのだ。

姥捨て山のおばあさんのようににも思えるが、それを有難く受け入れてしまおう。思い残すことは何もない。

思い残すことは何も……

15 十二日目（金曜日）

施設の入居日を迎えた。朝、持ってゆく物の点検をしながら車に積んだ。十一時頃、まだ床に就いていた母を起こして、ちょっと早い昼食を摂り少し世間話をしたあと時刻になったので車に乗せた。車をスタートさせると、母はうつむき加減で目を閉じている。空は雲一つなく晴れており、車の外は冷たい北風が吹きすさぶ。

二時半ごろ家を出たが二十分ぐらいで施設に着いた。入居手続きを済ませ支配人からケアマネージャー・リハビリ担当・看護師などの紹介を受ける。一通り打合せと確認が終わり、荷物を二階の22号室まで持っていった。先に持ち込んでいたテレビはセッティングが終わっていて、スイッチを入れると大相撲の取り組みが映った。窓からはポカポカと暖かい冬日が差し込んでいる。桜やアジサイの枝は堅い蕾をギュッと強張らせ、やがて訪れる春を待っている。母は今日からここで暮らすのだ。

一階に降りて最終確認を行い書類に捺印してホームを出た。面会は月二回。コロナ禍で施設内での直接の面会は禁止。出入り口のガラス窓越しで、PHS（電話）を通しての会話のみだという。テレビでよくやっている刑務所の接見シーンみたいだ。

家に帰る時、母は相撲を見ているふりをしていたが、家族で海外旅行に行きそのままひとり外国に残される人のような、寂しそうな横顔をしていた。

16 十二日目〔Ⅱ〕

ついにこの日が来た。感慨が自分を包むかと思ったがそんな事はない。

——95歳。もう充分生きた。

子供達には感謝している。このうえ自分の家で最期を迎えたいというのはわがままというものである。

施設に着き一通り紹介を受けたあと、看護師さんに付き添われシルバーカーを押して自分の部屋へ連れて行ってもらった。なるほど勝巳が言っていた通り陽当たりの良い明るい部屋だ。テレビをつけてもらおうと相撲をやっている。私はベッドに横になり、取り組みを見入っているふりをした。勝巳夫婦と繭子さんが部屋に入ってきて雑談をしていたが、しばらくすると「じゃあお元気で」と挨拶して帰って行った。

やっと子供たちに負担をかける事がなくなる、という安堵感とこれから迎えが来るその時までどうすればよいのかという不安が入り交ざって私を襲う。

——早くここの生活に慣れなければ

そう思っているところに、マイクでアナウンスがあった。集音器を耳に付けていないので、何を言っているのかわからない。少しするとヘルパーさんが来て



「夕食の時間ですよ」と言うのを私をベッドから起こしてくれた。シルバーカーを押す私の後ろから、

「エレベーターに乗って下に行きましょう。下りて左に行った突き当りが食堂です」

と付き添って教えてくれる。六時の食事が終わると部屋に戻って寛ぎ、八時には睡眠剤を飲んで就寝となる。これが毎日続き、そしてここで一生を終えるのか。

あっけないものだ。

17 エピローグ

母がいなくなり介護の無い生活が戻ってきた。繭子が時々母屋に訪れ、母の身の回りの物やいらぬ物を処分してくれている。毎週二回燃えるゴミの日に、ゴミ出し用の一番大きなゴミ袋が5個ずつ玄関に並ぶ。袋に入らない物は粗大ごみのシールを貼って指定日に出す。家の中はみるみる片付き、レンタルしていた母のベッド・車椅子・鉄製の手すりなども引き上げてもらった。僅かに父の遺影と花瓶、そして壁にかかる母が描いた百号の絵だけが、生活の名残を留めている。母屋は屋根の付いたただの空間となってしまった。母が施設に入ってから一週間ほどは

——これで良かったのだろうか

と自問自答していた。しかしやがてそれも無くなった。

あと少しで桜の季節を迎える。果たして母は施設に入るとき手渡した色鉛筆とスケッチブックを使ってくれるだろうか。窓から見える桜や草花を見て俳句を作り、絵に描いて便りをくれるだろうか。施設で読むために差し入れた本の感想を書いた手紙を、僕に出してくれるだろうか。

僕は庭に咲き出した「沈丁花」の花をはがきに描いて母宛に投函した。近況も一言添えて送ろうとしたが書けなかった。言葉は思い浮かぶのだが、母に家や庭を想起させる事が怖かった。春はすぐそこまで来ているのに気が重い。耳も遠くなり認知症が進んできた頭で、母はいったい何を考えて毎日を過ごしているのか？ 今からでも何かしてやれることはないか？ 厄介者を姥捨て山に追いやり、所払いをしただけだったのではなかったか？

母が「東野圭吾」の本と「郵便はがき」を何枚か欲しがっているから持って行ってあげてくれ、との連絡が鮎子からラインで来た。ホームに入る時、通信用に十枚ほどハガキを持たせたが、鮎子とは頻繁にやり取りしているらしい。しかし僕には未だに一通もハガキは来ていない。なぜなのか？

悶々とした日々が続いている。僕は父の時と同じように、もう一本十字架を背負ってしまったのか？  
わからない。

## 18 エピローグ 〔Ⅱ〕

入所して一週間が過ぎた。施設の生活にもだいたい慣れてきた。一日のスケジュールは朝から詰まっついていてせわしない。

朝七時に起こされ八時に朝食。訪問診療がありお茶を飲んで一服していると、十一時半に昼食のアナウンスがある。昼食を摂り食後一休みしてお風呂に入れてもらい、涼んでいると三時のおやつの時間になる。おやつを食べたあと部屋で少し本を読むかテレビを見ていると、もう六時の夕食の時間だ。夕食を食べて部屋に戻り子供たちにハガキを書く。少し考え事をしてしていると、施設の人が電気を消しに廻って来る。既に八時の就寝時間となっていた。

毎日同じスケジュールの繰り返しだ。夜、睡眠薬を飲んで寝てしまうと朝まで起きる事はない。お手洗いに起きた形跡もあるのだが覚えていない。

読書一つをとっても集中して読めないもので、同じ日でさえも前回読んだ所までの筋を忘れてしまっている。やがてだんだんつまらなくなり読むのをやめてしまう。仕方がないので毎日外を眺めている。固く閉じていた桜の蕾もようやく膨らみかけてきた。熊笹は相変わらず風にそよいでいるがアジサイはわずかに新芽を出そうとして黄緑色の点々を付けてきた。山吹やツツジも芽吹きかけており、春を待ち望んでいるようだ。

不満とか不便は感じない。三度の食事のほか毎日のスケジュールや週のイベントがきっちり決められている。しかし自分で行動する自由は無くなってきている。そもそも両方を望む方が無理と言うものだが、家に一人で居たときはそれがあった。シルバーカーを押せば郵便局まで行ったり、昼時に自分のお金でコンビニにサンドウィッチを買いに行ったり、好きな時間に近所を散歩する事も出来たのである。もちろん足腰が弱った今は望む術もないが、少なくとも時間の自由はあった。

施設は、外部からの面会もコロナ禍のため月二回と決まっており、直接面会に来た子供や孫たちとも対峙する事は出来ない。入居している人たちは購買部でお菓子を買って部屋で食べたりしているが、私はお金を持たされていないためそれできない。何かあったらナースコールを押せば看護師さんが来てはくれるが特段その必要もない。日々の決まったスケジュールをこなす以外はすることが見当たらない。



ここが私の終の棲家なのだろうか？ 95年間生きた結果がこれなのか。

——早く夫の元へ行きたい

敬虔なクリスチャンで生き方も愛情も真っ直ぐだった夫の心を、微妙に斜に構えて受け止めていた事を謝りたい。早く詫びに行きたい。

しかし春が来ればそんな憂鬱も少しは癒せるような気がする。

春が来れば……

桜が咲けば……

時が経てば……

……

……

突然ひらめきがあった。

そうだ。ここはこの世の、単なる仮住まいなのだ。

本当の私の『つひのすみか』は天にある。